葬列

石川啄木

久し振で帰つて見ると、嘗(かつ)ては『眠れる都会』などと時々土地(ところ)の新聞に罵られた盛岡も、五年以前とは余程その趣を変へて居る。先づ驚かれたのは、昔自分の寄寓して居た姉の家の、今裕福らしい魚屋の店と変つて、恰度自分の机を置いた辺(あたり)と思はれるところへ、吊された大章魚(おほだこ)の足の、極めてダラシなく垂れて居る事である。昨日二度、今朝一度、都合三度此家の前を通つた自分は、三度共此大章魚の首縊(くびくくり)を見た。若しこれが昔であつたなら、恁(こ)う何日も売れないで居ると、屹度(きつと)、自分が平家物語か何かを開いて、『うれしや水、鳴るは滝の水日は照るとも絶えず、……フム面白い

な。』などと唸つてるところへ、腐れた汁がポタリ〳〵と、襟首に落ちやうと云ふもんだ。願くは、今自分の見て居る間(うち)に、早く何処かの内儀(おかみ)さんが来て、全体(みんな)では余計だらうが、アノ一番長い足一本だけでも買つて行つて呉れれば可(いい)に、と思つた。此家(ここ)の隣屋敷の、時は五月の初め、朝な〳〵学堂へ通ふ自分に、目も覚むる浅緑の此上(こよ)なく嬉しかつた枳殻垣(からたちがき)も、いづれ主人(あるじ)は風流を解(げ)せぬ醜男(ぶをとこ)か、さらずば道行く人に見せられぬ何等かの秘密を此屋敷に蔵して置く底(てい)の男であらう、今は見上げる許り高い黒塗の板塀になつて居る。それから少許(すこし)行くと、大沢河原から稲田を横ぎつて一文字

に、幅広い新道（しんみち）が出来て居て、これに隣り合つた見すぼらしい小路（こうじ）、——自分の極く親しくした藻外といふ友の下宿の前へ出る道は、今廃道同様の運命になつて、花崗石（みかげいし）の截石（きりいし）や材木が処狭（ところせ）きまで積まれて、その石や木間から、尺もある雑草が離々として生ひ乱れて居る。自分は之を見て唯無性に心悲（うらがな）しくなつた。暫らく其材木の端に腰掛けて、昔の事を懐ふて見やうかとも思つたが、イヤ待て恁（こん）な昼日中に、宛然（さながら）人生の横町と謂つた様な此処を彷徨（うろつ）いて何か明処（あかるみ）で考へられぬ事を考へて居るのではないかと、通りがかりの巡査に怪まれでもしては、一代の不覚と思ひ返して止めた。然し若し

此時、かの藻外と二人であつたなら、屹度外見(みえ)を憚(はばか)らずに何か詩的な立廻を始めたに違ひない。兎角人間は孤独の時に心弱いものである。此三(みつ)の変遷は、自分には毫も難有くない変遷である。恁(こん)な変様(かはりやう)をする位なら、寧ろ依然(やはり)『眠れる都会』であつて呉れた方が、自分並びに『美しい追憶の都』のために祝すべきであるのだ。以前(もと)平屋造で、一寸見には妾の八人も置く富豪の御本宅かと思はれた県庁は、東京の某省に似せて建てたとかで、今は大層立派な二階立の洋館になつて居るし、盛岡の銀座通と誰かの冷評(ひやか)した肴町呉服町(さかなちやうごふくちやう)には、一度神田の小川町で見た事のある様な本屋や文房

具店も出来た。就中(なかんづく)破天荒な変化と云ふべきは、電燈会社の建つた事、女学生の靴を穿く様になつた事、中津川に臨んで洋食店(レストウラント)の出来た事、荒れ果てた不来方城(こずかたじやう)が、幾百年来の蔦衣(つたごろも)を脱ぎ捨てて、岩手公園とハイカラ化した事である。禿頭(はげあたま)に産毛が生えた様な此旧城の変方(かはりかた)などは、自分がモ少し文学的な男であると、『噫、汝不来方(こずかた)の城よ※［＃感嘆符三つ、36-上-12］汝は今これ、漸くに覚醒し来れる盛岡三万の市民を下瞰しつつ、……文明の儀表なり。昨(さく)の汝が松風明月の怨長(うらみとこし)なへに尽きず……なりしを知るものにして、今来つて此盛装せる汝に対するあらば、誰かまた我と共

に跪づいて、汝を讃するの辞なきに苦しまざるものあらむ。疑ひもなく汝はこれ文明の仙境なり、新時代の楽園なり。……然れども思へ、――我と共に此一片の石に踞して深く〳〵思へ、昨日(きのふ)杖を此城頭に曳いて、鐘声を截せ来る千古一色の暮風に立ち、涙を萋々(さいさい)たる草裡(さうり)に落したりし者、よくこの今日あるを予知せりしや否や。……然らば乃ち、春秋いく度か去来して世紀また新たなるの日、汝が再び昨の運命を繰返して、蔦蘿雑草(てうらざつさう)の底に埋もるるなきを誰か今にして保し得んや。……噫已(や)んぬる哉。』などとやつてのける種になるのだが、自分は毛頭悃(こん)な感じは起さなんだ。何故と

いふまでもない。漸々(やうやう)開園式が済んだ許りの、文明的な、整然(きちん)とした、別に俗気のない、そして依然(やはり)昔と同じ美しい遠景を備へた此新公園が、少からず自分の気に入つたからである。可愛い児供(こども)の生れた時、この児も或は年を老つてから悲惨(みじめ)な死様(しにざま)をしないとも限らないから、いつそ今斯(か)うスヤ〳〵と眠つてる間に殺した方が可(いい)かも知れぬ、などと考へるのは、実に天下無類の不所存(ぶしよぞん)と云はねばならぬ。だから自分は、此公園に上つた時、不図次の様な考を起した。これは、人の前で、殊に盛岡人の前では、些(ちと)憚つて然るべき筋の考であるのだが、茲(ここ)は何も本気で云ふのでなくて、唯序(ついで)に

白状するのだから、別段差閊もあるまい。考といふは恷だ。此公園を公園でなくして、ツマリ自分のものにして、人の入られぬ様に厚い枳殻垣を繞らして、本丸の跡には、希臘か何処かの昔の城を真似た大理石の家を建てて、そして、自分は雪より白い髪をドツサリと肩に垂らして、露西亜の百姓の様な服を着て、唯一人其家に住む。終日読書をする。霽れた夜には大砲の様な望遠鏡で星の世界を研究する。曇天か或は雨の夜には、空中飛行船の発明に苦心する。空腹を感じた時は、電話で川岸の洋食店から上等の料理を取寄る。尤も此給仕人は普通の奴では面白くない。顔は奈何でも

構はぬが、十八歳で姿の好い女、曙色(あけぼのいろ)か浅緑の簡単な洋服を着て、面紗(ヴェール)をかけて、音のしない様に綿を厚く入れた足袋を穿いて、始終無言でなければならぬ。掃除をするのは面倒だから、可成(なるべく)散らかさない様に気を付ける。そして、一年に一度、昔羅馬(ロウマ)皇帝が凱旋式に用ゐた輦(くるま)――それに擬(ま)ねて『即興詩人』のアヌンチヤタが乗廻した輦、に擬ねた輦に乗つて、市中を隈なく廻る。若し途中で、或は蹇(あしなへ)、或は盲目(めくら)、或は癩を病む者、などに逢つたら、(その前に能く催眠術の奥義を究めて置いて、)其奴(そいつ)の頭に手が触つた丈で癒してやる。……考へた時は大変面白かつたが、恁書いて見

ると、興味索然たりだ。饒舌（おしやべり）は品格を傷（そこな）ふ所以である。

立花浩一と呼ばるる自分は、今から二十幾年前に、此盛岡と十数哩（マイル）を隔てた或る寒村に生れた。其処の村校の尋常科を最優等で卒業した十歳の春、感心にも唯一人笈（きふ）をこの不来方城下に負ひ来つて、爾後八星霜といふもの、夏休暇（なつやすみ）毎の帰省を除いては、全く此土地で育つた。母がさる歴（れつき）とした旧藩士の末娘であつたので、随つて此旧城下蒼古の市（まち）には、自分のために、伯父なる人、伯母なる人、また従兄弟なる人達が少なからずある。その上自分が十三四歳の時には、今は亡

くなつた上の姉さへ此盛岡に縁付いたのであつた。自分は此等縁辺のものを代る〴〵喰ひ廻つて、そして、高等小学から中学と、漸々（だんだん）文の林の奥へと進んだのであつた。されば、自分の今猶生々とした少年時代の追想——何の造作もなく心と心がピタリ握手して共に泣いたり笑つたり喧嘩して別れたりした沢山の友人の事や、或る上級の友に、立花の顔は何処かナポレオンの肖像に似て居るネ、と云はれてから、不図軍人志願の心を起して毎日体操を一番真面目にやつた時代の事や、ビスマークの伝を読んでは、直（すぐ）小比公（せうびこう）気取の態度を取つて、級友の間に反目の種を蒔いた事や、生来虚弱で

歴史が好きで、作文が得意であつた処から、小ギボンを以て自任して、他日是非印度衰亡史を著はし、それを印度語に訳して、かの哀れなる亡国の民に愛国心を起さしめ、独立軍を挙げさせる、イヤ其前に日本は奈何(どう)かしてシヤムを手に入れて置く必要がある。……其時は、自分はバイロンの轍(てつ)を踏んで、筆を剣に代へるのだ、などと論じた事や、その後、或るうら若き美しい人の、潤める星の様な双眸(さうぼう)の底に、初めて人生の曙の光が動いて居ると気が付いてから、遽(には)かに夜も昼も香(かぐ)はしい夢を見る人となつて旦暮(あけくれ)『若菜集』や『暮笛集』を懐にしては、程近い田畔(たんぼ)の中にある小さい寺

の、巨きい栗樹の下の墓地へ行つて、青草に埋れた石塔に腰打掛けて一人泣いたり、学校へ行つても、倫理の講堂で竊と『乱れ髪』を出して読んだりした時代の事や、——すべて慕かしい過去の追想の多くは、皆この中津河畔の美しい市を舞台に取つて居る。盛岡は実に自分の第二の故郷なんだ。『美しい追憶の都』なんだ。

十八歳の春、一先づこの第二の故郷を退いて、第一の故郷に帰つた。そして十幾ヶ月の間閑雲野鶴を友として暮したが、五年以前の秋、思立つて都門の客となり、さる高名な歴史家の書生となつた。翌年は文部省の検定試験を受けて、歴史科中等教員の免状を貰ふた。

唯茲に一つ残念なのは、東洋のギボンを以て自ら任じて居た自分であるのに、試験の成績の、怪しい哉、左程上の部でなかつた事である。今は茨城県第〇中学の助教諭、両親と小妹（せうまい）とをば、昨年の暮任地に呼び寄せて、余裕もない代り、別に窮迫もせぬ家庭を作つた。

今年の夏は、校長から常陸（ひたち）郷土史の材料蒐集を囑託せられて、一箇月半の楽しい休暇を全く其為めに送つたので、今九月の下旬、特別を以て三週間の賜暇を許され、展墓と親戚の廻訪と、外に北上河畔に於ける厨川柵（くりやがはのさく）を中心とした安倍氏勃興の史料について、少しく実地踏査を要する事があつて、五年振に此盛岡に

は帰つて来たのである。新山堂と呼ばるる稲荷神社の直背後（すぐうしろ）の、母とは二歳（ふたつ）違ひの姉なる伯母の家に車の轅（ながえ）を下させて、出迎へた、五年前に比して別に老の見えぬ伯母に、『マア、浩（かう）さんの大きくなつた事！』と云はれて、新調の背広姿を見上げ見下しされたのは、実に一昨日（をとつひ）の秋風すずろに蒼古の市に吹き渡る穏やかな黄昏時（たそがれどき）であつた。

　遠く岩手、姫神、南昌（なんしやう）、早池峰（はやちね）の四峯を繞らして、近くは、月に名のある鑪山（たたらやま）、黄牛（あめうし）の背に似た岩山、杉

の木立の色鮮かな愛宕山を控へ、河鹿鳴くなる中津川の浅瀬に跨(また)がり、水音緩(ゆる)き北上の流に臨み、貞任(さだたう)の昔忍ばるる夕顔瀬橋、青銅の擬宝珠の古色滴(したた)る許りなる上中(かみなか)の二橋、杉土堤(すぎどて)の夕暮紅の如き明治橋の眺めもよく、若しそれ市の中央に巍然(ぎぜん)として立つ不来方城に登つて瞰下(みおろ)せば、高き低き茅葺(ちがや)柾葺(まさがや)の屋根々々が、茂れる樹々の葉蔭に立ち並んで見える此盛岡は、実に誰が見ても美しい日本の都会の一つには洩れぬ。誰やらが初めて此市に遊んで、『杜陵(とりよう)は東北の京都なり。』と云つた事があるさうな。『東北の京都』と近代的な言葉で云へば余り感心しないが、自分は『みちのくの平安

城』と風雅な呼方をするのを好む。

　この美しい盛岡の、最も自分の気に入つて見える時は、一日の中では夜、天候では雨、四季の中では秋である。この三（みつ）を綜合すると、雨の降る秋の夜が一番好い事になるが、然しそれでは完全に過ぎて、余り淋し過ぎる。一体自分は歴史家であるから、開闢（かいびやく）以来此世界に現れた、人、物、事、に就いては、少くも文字に残されて居る限りは大方知つて居るつもりであるが、未嘗（いまだかつ）て、『完全なる』といふ形容詞を真正面から冠せることの出来る奴には、一人（ひとり）も、一個（ひとつ）も、一度（ひとたび）も、出会（でつくは）した事がない。随つて自分は、『完全』といふ事には極

めて同情が薄いのである。完全でなくても構はぬ、ただ抜群であれば可い。世界には随処に『不完全』が転がつて居る。其故に『希望』といふものが絶えないのだ。此『希望』こそ世界の生命である、歴史の生命である、人間の生命である。或る学者は、『歴史とは進化の義なり。』と説いて居るが、自分は『歴史とは希望の義なり。』と生徒に教へて置いた。世界の歴史には、随分間違つた希望のために時間と労力とを尽して、そして『進化』と正反対な或る結果を来した例が少なくない。此『間違つた希望』と『間違はない希望』とを鑑別するのが、正当なる歴史の意義ではあるまいかと自

分は思ふ。自分一個の私見では、六千載の世界史の中、ペリクリース時代の雅典（アテーネ）以後、今日に到る部分は、間違つた希望に依る進化、換言すれば、堕落せる希望に依る堕落、の最も大なる例である。斯う考へると、誠に此世が情なく心細くなるが、然し此点（ここ）が却つて面白い、頗る面白い。自分は『完全』といふものは、人間の数へ得る年限内には決して此世界に来らぬものと仮定して居る。（何故なれば、自分は『完全になる』とは、水が氷になる如く、希望と活動との死滅する事であると解釈して居るからだ。）だから、我等の過去は僅々六千載に過ぎぬが、未来には幾百千億万年あるか知れな

い。この無限の歴史が、乃ち我等人間の歴史であると思ふと、急に胸が豁(ひら)いた様な感じがする。無限無際の生命ある『人間』に、三千年位の堕落は何でもないではないか。加之(しかのみならず)、較々(やや)完全に近かつた雅典の人間より、遥かに完全に遠(とほざ)かつた今の我々の方が、却つて〱大なる希望を持ち得るではないか。……斯く、真理よりも真理を希求する心、完全よりも完全に対する希望を尊しとする自分が、夜の盛岡の静けさ、雨の盛岡の淋しさ、秋の盛岡の静けさ寂しさは愛するけれども、奈何(どう)して此三(みつ)が一緒になつて三足揃(さんぞく)つた完全な鍋、重くて黒くて冷たくて堅い雨ふる秋の夜といふ大

きい鍋を頭から被る辛さ切なさを忍ぶことが出来やう。雨と夜と秋との盛岡が、何故殊更に自分の気に入るかは、自分の知つた限りでない。多分、最近三十幾年間の此市の運命が、乃ち雨と夜と秋との運命であつた為めでがなあらう。

昨日は、朝まだきから降り初めた秋雨が、午後の三時頃まで降り続いた。長火鉢を中に相対して、『新山堂の伯母さん』と前夜の続きの長物語――雨の糸の如くはてしない物語をした。自分の父や母や光ちやん(妹)の事、伯母さんの四人の娘の事、八歳で死んだ源坊の事、それから自分の少年時代の事、と、これら

凡百の話題を緯にして、話好の伯母さんは自身四十九年間の一切の記憶の糸を経に入れる。此はてしない、蕭やかな嬉しさの籠つた追憶談は、雨の盛岡の蕭やかな空気、蕭やかな物音と、全く相和して居た。午時近くなつて、隣町の方から、『豆腐ア』といふ、低い、呑気な、永く尾を引張る呼声が聞えた。嗚呼此『豆腐ア』！　これこそは、自分が不幸にも全五年の間忘れ切つて居た『盛岡の声』ではないか。此低い、呑気な、尾を引張る処が乃ち、全く雨の盛岡式である。此声が蕭やかな雨の音に漂ふて、何十度か自分の耳に怪しくひびいた後、漸やく此家の門前まで来た。そして、遠

くで聞くも近くで聞くも同じやうな一種の錆声で、矢張低く呑気に『豆腐ア』と、呟やく如く叫んで過ぎた。伯母さんは敢て気が付かなかつたらしい。軈（やが）て、十二時を報ずるステーシヨンの工場の汽笛が、シツポリ濡れた様な唸りをあげる。と、此市に天主教を少し許り響かせてゐる四家町（よつやちやう）の教会の鐘がガラン〳〵鳴り出した。直ぐに其の音を打消す他の響が伝はる。これは不来方城畔（はん）の鐘楼から、幾百年来同じ鯨音（おと）を陸奥（みちのく）の天（そら）に響かせて居る巨鐘の声である。それが精確に十二の数を撞き終ると、今迄あるかなきかに聞えて居た市民三万の活動の響が、礑（はた）と許り止んだ。『盛岡』が今（いま）今日の

昼飯を喰ふところである。

『オヤマア私とした事が、……御飯の仕度まで忘れて了つて、……』

といつて、伯母さんはアタフタと立つた。そして自分に云つた、

『浩さん、豆腐屋が来なかつたやうだつたネ。』

此伯母さんの一挙一動が悉く雨の盛岡に調和して居る。

朝行つた時には未だ蓋が明かなかつたので食後改めて程近い銭湯へ行つた。大きい蛇目傘をさして、高い足駄を穿いて、街へ出ると、矢張自分と同じく、大き

い蛇目傘、高い足駄の男女が歩いて居る。皆無言で、そして、泥汁（どろ）を撥ね上げぬ様に、極めて静々と、一足毎に気を配つて歩いて居るのだ。両側の屋根の低い家には、時に十何年前の同窓であつた男の見える事がある。それは大抵大工か鍛冶屋か荒物屋かである。又、小娘の時に見覚えて置いた女の、今は髪の結び方に気をつける姉さんになつたのが、其処此処の門口に立つて、呆然（ぼんやり）往来を眺めて居る事もある。此等旧知の人は、決して先方から話かける事なく、目礼さへ為（す）る事がない。これは、自分には一層雨の盛岡の趣味を発揮して居る如く感ぜられて、仲々奥床しいのである。総じて

盛岡は、其人間、其言語、一切皆克（よ）く雨に適して居る。人あり、来つて盛岡の街々を彷徨（さまよ）ふこと半日ならば、必ず何街（どこ）かの理髪床（りはつどこ）の前に、銀杏髷（いちやうまげ）に結つた丸顔の十七八が立つて居て、そして、中なる剃手（そりて）と次の如き会話を交ふるを聞くであらう。

女『アノナハーン、アエヅダケァガナハーン、昨日（キノナ）スアレー、彼（ア）ノ人（シタ）アナーハン。』

男『フンフン、御前（おめあ）ハンモ行（エッ）タケスカ。フン、真（ホン）ニソダチナハン。アレガラナハン、家（エ）サ来ルヅギモ面白（オモシエ）ガタンチエ。ホリヤ〱、大変（テエヘン）ダタアンステア。』

此奇怪なる二人の問答には、少くとも三幕物に書き

下すに足る演劇的の事実が含まれて居る。若し一度も盛岡の土を踏んだことのない人で、此会話の深い〳〵意味と、其誠に優美な調子とを聞き分くる事が出来るならば、恐らく其人は、大小説家若くは大探偵の資格ある人、然らずば軒の雨滴の極めて蕭やかな、懶気（ものうげ）な、気の長い響きを百日も聞き慣れた人であらう。

　澄み切つた鋼鉄色（かうてついろ）の天蓋を被（かづ）いて、寂然（じやくねん）と静まりかへつた夜の盛岡の街を、唯一人犬の如く彷徨（うろつ）く楽みは、其昔、自分の夜毎に繰返すところであつた。然し、五年振で帰つて僅か二夜を過した許りの自分は、其二夜を遺憾乍ら屋根の下にのみ明かして了つたのである。

尤も今は電燈の為めに、昔の楽みの半分は屹度失くなつたであらう。自分は茲（ここ）で、古い記憶を呼び覚して、夜の街の感想を説くことを、極めて愉快に感ずるのであるが、或一事の蟠（わだかま）るありて、今往時を切実に忍ぶことを遮つて居る。或る一事とは、乃ち昔自分が夜の盛岡を彷徨（うろつ）いて居た際に起つた一奇談である。――或夜自分は例によつて散歩に出懸けた。仁王小路から三戸町（さんのへちやう）、三戸町から赤川、此赤川から桜山の大鳥居へ一文字に、畷（なはて）といふ十町の田圃路がある。自分は此十町の無人境（むにんきやう）を一往返するを敢て労としなかつた。のみならず、一寸路を逸（そ）れて、かの有名な田中の石地蔵

の背(せな)を星明りに撫づるをさへ、決して躊躇せなんだ。そして、平生(ひごろ)の癖の松前追分を口笛でやり乍ら、ブラリ〱と引返して来ると、途中で外套を着、頭巾を目深に被(かぶ)つた一人の男に逢つた。然し別段気にも留めなかつた。それから急に思出して、自分と藻外と三人鼎足的(ていそくてき)関係のあつた花郷(かきやう)を訪ねて見やうと、少しく足を早めた。四家町(よつやちやう)は寂然(ひつそり)として、唯一軒理髪床の硝子戸に燈光(あかり)が射し、中から話声が洩れたので、此処も人間の世界だなと気の付く程であつた。間もなく花屋町に入つた。断つて置く、此町の隣が密淫売町(ぢごくまち)の大工町(だいくちやう)で、芸者町なる本町(ほんちやう)通も程近い。花郷が宿は一寸職

業の知れ難い家である。それも其筈、主人は或る田舎の村長で、此本宅には留守居の祖母が唯一人、相応に暮して居る。此祖母なる人の弟の子なる花郷は、此家の二階に本城を構へて居るのだ。二階を見上げると、障子に燈火（あかり）が射して居る。ヒヨウと口笛を吹くと、矢張ヒヨウと答へた。今度はホーホケキヨとやる、（これは自分の名の暗号であつた。）復ヒヨウと答へた。これだけで訪問の礼は既に終つたから、平生（いつも）の如く入つて行かうと思つて、上框（あがりがまち）の戸に手をかけやうとすると、不意、不意、暗中に鉄の如き手あつて自分の手首をシタタカ握つた。愕然（びつくり）し乍ら星明（ほしあかり）で透（すか）して見た

が、外套を着て頭巾を目深に被つた中脊の男、どうやら先刻(さつき)暇で逢つた奴に似て居る。

『立花、俺に見付かつたが最後ぢやぞツ。』

驚いた、真(まこと)に驚いた。この声は我が中学の体操教師、須山(すやま)といふ予備曹長で、校外監督を兼ねた校中第一の意地悪男の声であつた。

『先刻田圃で吹いた口笛は、あら何ぢや？　俗歌ぢやらう。後を尾(つ)けて来て見ると、矢張(やつぱり)口笛で密淫売(ぢごく)と合図をしてけつかる。……』

自分は手を握られた儘、開(あ)いた口が塞がらぬ。

『此間(こなひだ)職員会議で、貴様が毎晩一人で外出するが、行

先がどうも解らん。大に怪しいちふ話が出た。貴様の居る仁王小路が俺の監督範囲ぢやから、俺は赤髯（校長）のお目玉を喰つたのぢや、けしからん、不埒（ふらち）ぢや。其処で俺は三晩つづけて貴様に尾行した。一昨夜（をととひ）は呉服町で綺麗な簪（かんざし）を買つたのを見たから、何気なく聞いて見ると、妹へ遣るのだと嘘吐いたな。昨晩（ゆうべ）は古河端のさいかちの樹の下で見はぐつた。今夜といふ今夜こそ現場（げんぢやう）を見届けたぞ。案の諚（ぢやう）大工町ぢやつた。貴様は本町へ行く位の金銭（ぜに）は持つまいもんナ。……ハハア、軍隊なら営倉ぢや。』

自分の困憊（こんぱい）の状察すべしである。恰（あたか）も此時、洋燈（ランプ）

片手に花郷が戸を明けた。彼は極めて怪訝（くわいが）に堪へぬといつた様な顔をして、盛岡弁で、

『何（どう）しあんした？』

と自分に問うた。自分は急に元気を得て、逐一（ちくいち）事情を話し、更に須山に向いて、

『先生、此町は大工町ではごあんせん、花屋町でごあんす。小林君も淫売婦（ぢごく）ではごあんせんぜ。』と云つた。

須山は答へなかつたが、花郷は手に持つ洋燈を危気（あやふげ）に動かし乍ら、洒脱（しやだつ）な声をあげて叫び出した。

『立花白蘋（はくひん）君の奇談々々！』

『立花、貴様余ツ程気を付けんぢや不可（いかん）ぞ。よく覚え

て居れツ。』

と怒鳴るや否や、須山教師の黒い姿は、忽ち暗中(あんちゆう)に没したのであつた。

　自分は既に、五年振で此市(このし)に来て目前(まのあたり)観察した種々の変遷と、それを見た自分の感想とを叙べ、又此市(このし)と自分との関係から、盛岡は美しい日本の都会の一つである事、此美しい都会が、雨と夜と秋との場合に最も自分の気に入るといふ事を叙べ、そして、雨と夜との盛岡の趣味に就いても多少の記述を試みた。そこで今自分は、一年中最も楽しい秋の盛岡――大穹窿(だいきゆうりゆう)が無

辺際に澄み切つて、空中には一微塵の影もなく、田舎口から入つて来る炭売薪売の馬の、冴えた〳〵鈴の音が、市の中央まで明瞭響く程透徹であることや、雨滴式の此市の女性が、厳粛な、赤裸々な、明哲の心の様な秋の気に打たれて、『ああ、ああ、今年もハア秋でごあんすなッす――。』と口々に言ふ其微妙な心理のはたらきや、其処此処の井戸端に起る趣味ある会話や、乃至此女性的なる都会に起る一切の秋の表現、――に就いて、出来うる限り精細な記述をなすべき機会に逢着した。

が、自分は、其秋の盛岡に関する精細な記述に代ふ

るに、今、或る他の一記事を以てせねばならぬのである。

『或る他の一記事』といふのは、此場合に於て決して木に竹をつぐ底（てい）の突飛なる記事ではないと自分は信ずる。否、或は、此記事を撰む方が却つて一層秋の盛岡なるものを的切に表はす所以であるのかも知れない。何故なれば、此一記事といふのは、美しい盛岡の秋三ヶ月の中、最も美しい九月下旬の一日、乃ち今日ひと日の中に起つた一事件に外ならぬからである。

実際を白状すると、自分が先刻（せんこく）晩餐を済ましてから、少許（すこし）調査物（しらべもの）があるからと云つて話好の伯母さんを避け、

此十畳の奥座敷に立籠つて、余り明（あか）からぬ五分心（ごぶじん）の洋燈の前に此筆を取上げたのは、実は、今日自分が偶然に路上で出会した一事件――自分と何等の関係もないに不拘（かかはらず）、自分の全思想を根底から揺崩（ゆりくづ）した一事件――乃ち以下に書き記す一記事を、永く〳〵忘れざらむためであつたのだ。然も自分が此稀有（けう）なる出来事に対する極度の熱心は、如何にして、何処で、此出来事に逢つたかといふ事を説明するために、実に如上（によじやう）数千言の不要（むだ）なる記述を試むるをさへ、敢て労としなかつたのである。

断つて置く、以下に書き記す処は、或は此無限の生

命ある世界に於て、殆んど一顧の値だに無き極々（ごくごく）些末の一事件であるのかも知れない。されば若し此一文を読む人があつたなら、その人は、『何だ立花、君は這麼（こんな）事を真面目腐つて書いたのか。』と頭から自分を嘲笑（あざわら）ふかも知れない。が然し、此一事件は、自分といふ小なる一人物の、小なる二十幾年の生涯に於て、親しく出会した事件の中では、最も大なる、最も深い意味の事件であると信ずる。自分は恁（かう）信じたからこそ、此市（ここ）の名物の長沢屋の豆銀糖でお茶を飲み乍ら、稚ない時から好きであつた伯母さんと昔談をする楽みをさへ擲（なげう）ち去つて、明からぬ五分心の洋燈の前に、筆の渋り

に汗ばみ乍ら此苦業を続けるのだ。

又断つて置く、自分は既に此事件を以て親(みづか)ら出会した事件中の最大事件と信じ、其為に二十幾年来養ひ来つた全思想を根底から揺崩された。そして、今新らしい心的生涯の原頭(げんとう)に立つた。――然(さう)だ、今自分の立つて居る処は、慥(たし)かに『原頭』である。自分はまだ、一分も、一厘も、此大問題の解決に歩を進めて居らぬのだ。或は今夜此筆を擱(さしお)く迄には、何等か解決の端(はし)を発見するに到るかも知れぬが、……否々(いやいや)、それは望むべからざる事だ。此新たに掘り出された『ローゼツタ石』の、表に刻まれた神聖文字(ハイエログリフ)は、如何にトマス・

ヨングでもシヤムボリヲンでも、とても十年二十年に読み了る事が出来ぬ様に思はれる。

自分が今朝新山祠畔（しんざんしはん）の伯母の家を出たのは、大方八時半頃でがなぁつたらぅ。昨日の雨の名残の潦（みづたまり）が路の処々に行く人の姿々を映して居るが、空は手掌（てのひら）程の雲もなく美しく晴れ渡つて、透明な空気を岩山の上の秋陽（あきのひ）がホカ〳〵と温めて居た。

加賀野新小路の親縁（みより）の家では、市役所の衛生係なる伯父が出勤の後で、瘦せこけた伯母の出して呉れた麦煎餅は、昨日の雨の香を留めたのであらう、少なから

ず湿々(じめじめ)して居た。此家から程近い住吉神社へ行っては、昔を語る事多き大公孫樹(おほいてふ)の、まだ一片(ひとひら)も落葉せぬ枝々を、幾度となく仰ぎ見た。此樹の下から左に折れると凹凸(でこぼこ)の劇しい藪路、それを東に一町許(ばかり)で、天神山に達する。しん〳〵と生ひ茂つた杉木立に囲まれて、苔蒸せる石甃(いしだたみ)の両側秋草の生ひ乱れた社前数十歩の庭には、ホカ〳〵と心地よい秋の日影が落ちて居た。遠くで鶏の声の聞えた許り、神寂びた宮居は寂然(ひつそり)として居る。周匝(あたり)にひびく駒下駄の音を石甃に刻み乍ら、拝殿の前近く進んで、自分は図らずも懐かしい旧知己の立つて居るのに気付いた。旧知己とは、社前に相対して

ぬかづいて居る一双の石の狛(こまいぬ)である。詣づる人又人の手に撫でられて、其不格好な頭は黒く膏光(あぶらびか)りがして居る。そして、其又顔といつたら、蓋(けだ)し是れ天下の珍といふべきであらう、唯極めて無造作に凸凹を造(こしら)へた丈けで醜くもあり、馬鹿気ても居るが、克(よ)く見ると実に親しむべき愛嬌のある顔だ。全く世事を超脱した高士の俤(おもかげ)、イヤ、それよりも一段(もつと)俗に離れた、俺は生れてから未だ世の中といふものが西にあるか東にあるか知らないのだ、と云つた様な顔だ。自分は昔、よく友人と此処へ遊びに来ては、『石狛(こまいぬ)よ、汝も亦詩を解する奴だ。』とか、『石狛よ、汝も亦吾党の士だ。』と

か云つて、幾度も幾度も杖で此不格好な頭を擲つたものだ。然し今日は、幸ひ杖を携へて居なかつたので、丁寧に手で撫でてやつた。目を転ずると、杉の木立の隙（ひま）から見える限り、野も山も美しく薄紅葉して居る。宛然（さながら）一幅の風景画の傑作だ。周匝（あたり）には心地よい秋草の香が流れて居る。此香は又、自分を十幾年の昔に返した。郷校から程近い平田野（へいだの）といふ松原、晴れた日曜の茸狩（たけがり）に、この秋草の香と初茸の香とを嗅ぎ分けつつ、いとけなき自分は、其処の松蔭、此処の松蔭と探し歩いたものであつた。——

昼餐（ひるげ）をば神子田（みこだ）のお苑（その）さんといふ従姉（新山堂の伯

母さんの二番目娘で、自分より三歳の姉である。）の家で済ました。食後、お苑さんは、去年生れた可愛い赤坊の小さい頭を撫で乍ら、『ひとつお世話いたしませうか、浩さん。』と云つた。『何をですか。』『アラ云はなくつても解つてますよ。奇麗な奥様をサ。』と楽しげに笑ふのであつた。

帰路（かへり）には、馬町の先生を訪ねて、近日中に厨川柵（くりやがはのさく）へ一緒に行つて貰ふ約束をした。馬町の先生といへば、説明するまでもない。此地方で一番有名な学者で、俳人で、能書家で、特に地方の史料に就いては、極めて該博精確な研究を積んで居る、自分の旧師である。

幅広く美しい内丸の大逵（おほどほり）、師範学校側の巨鐘が、澄み切つた秋の大空の、無辺際な胸から搾り出す様な大梵音をあげて午後の三時を報じた時、自分は恰度其鐘楼の下を西へ歩いて居た。立派な県庁、陰気な師範学校、石割桜で名高い裁判所の前を過ぎて、四辻へ出る。と、雪白の衣（きぬ）を着た一巨人が、地の底から抜け出でた様にヌツと立つて居る。——

　これは此市（このし）で一番人の目に立つ雄大な二階立（にかいだち）の白堊館（はくあかん）、我が懐かしき母校である。盛岡中学校である。巨人？　然（さう）だ、慥かに巨人だ。啻（ただ）に盛岡六千戸の建築中の巨人である許りでなく、また我が記憶の世界にあ

つて、総ての意味に於て巨人たるものは、実にこの堂々たる、巍然(ぎぜん)たる、秋天一碧の下に兀(こつ)として聳え立つ雪白の大校舎である。昔、自分は此巨人の腹中にあつて、或時は小ナポレオンであつた、或時は小ビスマークであつた、或時は小ギボンであつた、或時は小クロムウエルであつた、又或時は、小ルーソーとなり、小バイロンとなり、学校時代のシルレルとなつた事もある。嘗(かつ)て十三歳の春から十八歳の春まで全(まる)五年間の自分の生命といふものは、実に此巨人の永遠なる生命の一小部分であつたのだ。噫(ああ)、然だ、然だつけ、と思ふと、此過去の幻の如き巨人が、怎(どう)やら揺ぎ出す様に見えた。

が、矢張動かなんだ、地から生え抜いた様に微塵も動かなんだ、秋天一碧の下に雪白の衣を着て突立つたまま。

印度衰亡史は云はずもの事、まだ一冊の著述さへなく、茨城県の片田舎で月給四十円の歴史科中等教員たる不甲斐なきギボンは、此時、此歴史的一大巨人の前におのづから頭（かうべ）の低（た）るるを覚えた。

白色の大校舎の正面には、矢張白色の大門柱が、厳めしく並び立つて居る。この門柱の両の袖には、又矢張白色の、幾百本と数知れぬ木柵の頭（かしら）が並んで居る。白！　白！　白！　此白は乃ち、此白い門に入りつ出

つする幾多うら若き学園の逍遙者の、世の塵に染まぬ潔白な心の色でがなあらう。柵の前には一列をなして老いた桜の樹が立つて居る。美しく紅葉した其葉は、今傾きかけた午後三時の秋の日に照されて、いと物静かに燃えて見える。五片六片、箒目見ゆる根方の土に散つて居るのもある。柵と桜樹の間には一条の浅い溝があつて、掬(むす)ばば凝(こ)つて掌上(てのひら)に晶(たま)ともなるべき程澄みに澄んだ秋の水が、白い柵と紅い桜の葉の影とを浮べて流れて居る。柵の頭の尖端(とがり)々々には、殆んど一本毎に真赤な蜻蛉が止つて居る。

自分は、えも云はれぬ懐かしさと尊さに胸を一杯に

し乍ら此白門に向つて歩を進めた。溝に架(わた)した花崗石(みかげいし)の橋の上に、髪ふり乱して垢光りする襤褸(ぼろ)を着た女乞食(をなごこじき)が、二歳許りの石塊(いしくれ)の様な児に乳房を啣(ふく)ませて坐つて居た。其周匝(めぐり)には五六人の男の児が立つて居て、何か秘々(ひそひそ)と囁き合つて居る。白玉殿前(はくぎよくでんぜん)、此一点の醜悪！　此醜悪をも、然し、自分は敢て醜悪と感じなかつた。何故なれば、自分は決して此土地の盛岡であるといふことを忘れなかつたからである、市の中央の大逵(おほどほり)で、然も白昼、穢(きた)ない〳〵女乞食が土下座して、垢だらけの胸を披(はだ)けて人の見る前に乳房を投げ出して居る！　この光景は、大都乃至は凡ての他の大都会に

決して無い事、否、有るべからざる事であるが、然し此盛岡には常に有る事、否、之あるがために却つて盛岡の盛岡たる所以を発揮して見せる必要な条件であるのだ。されば自分は、之を見て敢て醜悪を感ぜなんだのみならず、却つて或る一種の興味を覚えた。そして静かに門内に足を入れた。

　校内の案内は能く知つて居る。門から直ぐ左に折れて、ヅカ〱と小使室の入口に進んだ。

『鹿川（かがは）先生は、モウお退出（ひけ）になりましたか？』

　鹿川先生といふは、抑々（そもそも）の創始（はじめ）から此学校と運命を偕（とも）にした、既に七十近い、徳望県下に鳴る老儒者であ

る。されば、今迄此処の講堂に出入した幾千と数の知れぬうら若い求学者の心よりする畏敬の情が、自ら此老先生の一身に聚つて、其痩せて千年の鶴の如き老軀は、宛然これ生きた教育の儀表となつて居る。自白すると自分の如きも昔二十幾人の教師に教を享けたるに不拘、今猶しみ〴〵と思出して有難さに涙をこぼすのは、唯此鹿川先生一人であるのだ。今日の訪問の意味は、云はずと解つて居る。

自分の問に対して、三秒か五秒の間答がなかつたが、霎時して、

『イヤー立花さんでアごあせんか？　これや怎うもお

久振でごあんした喃。』

と聞覚えのある、錆びた〳〵声が応じた。ああ然だ、この声の主を忘れてはならぬ。鹿川先生と同じく、此校創立以来既に三十年近く勤続して居る正直者、歩振の可笑ところから附けられた、『家鴨』といふ綽名をも矢張三十年近く呼ばれて居る阿部老小使である。

『今日はハア土曜日でごあんすから、先生方は皆お帰りになりあんしたでア。』

土曜日？　おゝ然であつた。学校教員は誰しも土曜日の来るを指折り数へて待たぬものがない。自分も其

教員の一人であり、且つ又、この一週七曜の制は、黄道十二支と共に、五千年の昔、偉大なるアツケデヤ人の創めたもので、其後希臘人は此制をアレキサンデリヤから輸入し、羅馬人は西暦紀元の頃に八日一週の旧制を捨てて此制を採用し、ひいて今日の世界に到つたものである、といふ事をさへ、克く研究して知つて居る癖に、怎うして今日は土曜日だといふ事を忘却して居たものであらう、誠に頓馬な話である。或は自分は、滞留三日にして早く既に盛岡人の呑気な気性の感化を蒙つたのかも知れない。

此小使室の土間に、煉瓦で築き上げた大きな竈（かまど）が

あつて、其上に頗る大きな湯釜が、昔の儘に湯を沸ら(たぎ)し居る。自分は此学校の一年生の冬、百二十人の級友に唯二つあてがはれた暖炉(ストーブ)には、力の弱いところから近づく事も出来ないで、よく此竈の前へ来て昼食のパンを噛(かぢ)つた事を思出した。そして、此処を立去つた。

門を出て、昔十分休毎によく藻外と花郷と三人で楽しく語り合つた事のある、玄関の上の大露台(だいバルコニイ)を振仰いだ。と、恰度此時、女乞食の周匝(めぐり)に立つて居た児供(こども)の一人が、頓狂な声を張上げて叫んだ。

『アレ〱、がんこア来た、がんこア来た。』がんこと は盛岡地方で『葬列』といふ事である。此声の如何に

高かつたかは、自分が悠々たる追憶の怡楽（いらく）の中から、俄かに振返つて、其児供の指（ゆびさ）す方を見たのでも解る。これは恰度、門口へ来た配達夫に、『△△さん、電報です。』と穏かに云はれるよりも、『電報ツ。』と取つて投げる様なけたたましい声で叫ばれる方が、一層其電文が心配なと同じ事で、自分は実際、甚麼（どんな）珍らしい葬列かと、少からず慌てたのであつた。

此頓狂なる警告は、嘘ではなかつた。幅広く、塵も留めず美くしい、温かな秋の日に照らされた大逵（おほどほり）を、自分が先刻（さつき）来たと反対な方角から、今一群の葬列が徐々として声なく練つて来る。然も此葬列は、実に珍

らしいものであつた。唯珍らしい許りではない、珍らしい程見すぼらしいものであつた。先頭に立つたのは、処々裂けた一対の高張、次は一対の蓮華の造花（つくりばな）、其次は直ぐ棺である。此棺は白木綿で包まれた上を、無造作に荒縄で縛（ばく）されて、上部に棒を通して二人の男が担いだのであつた。この後には一群の送葬者が随つて居る。数へて見ると、一群の数は、驚く勿れ、たつた六人であつた。驚く勿れとは云つたものの、自分は此時少なからず驚いたのである。更に又驚いたのは、此六人が、揃ひも揃つて何れも、少しも悲し気な処がなく、静粛な点もなく、恰も此見すぼらしい葬式に会する事

を恥づるが如く、苦い顔をして遽々(きよろきよろ)然と歩いて来る事である。自分は、宛然(さながら)大聖人の心の如く透徹な無辺際の碧穹窿(あをてんじやう)の直下、広く静かな大逵を、この哀れ果敢なき葬列の声無く練り来るを見て、或る名状し難き衝動を心の底の底に感じた。そして、此光景は蓋し、天が自分に示して呉れる最も冷酷なる滑稽の一であらうなどと考へた。と又、それも一瞬、これも一瞬、自分は、『これは囚人の葬式だナ。』と感じた。

理由(いはれ)なくして囚人の葬式だナと、不吉極まる観察を下すなどは、此際随分突飛な話である。が、自分には其理由がある。――たしか十一歳の時であつた。早く

妻子に死別れて独身生活（ひとりぐらし）をして居た自分の伯父の一人が、窮迫の余り人と共に何か法網に触るる事を仕出来（しでか）したとかで、狐森一番戸に転宅した。（註、狐森一番戸は乃ち盛岡監獄署なり。）此時年齢が既に六十余の老体であつたので、半年許り経つて遂々獄裡で病死した。此『悲惨』の結晶した遺骸を引取つたのは、今加賀野新小路に居る伯父である。葬式の日、矢張今日のそれと同じく唯六人であつた会葬者の、三人は乃（すなは）ち新山堂の伯母さんと自分とであつた。自分は其時稚心（をさなごころ）にも猶この葬式が普通でない事、見すぼらしい事を知つて、行く路々ひそかに肩身の狭くなるを感

じたのであつた。されば今、かの六人の遽々然（きよろきよろ）たる歩振（あゆみぶり）を見て、よく其心をも忖度（そんたく）する事が出来たのである。

　これも亦一瞬。

　列の先頭と併行して、桜の樾（なみき）の下（もと）を来る一団の少年があつた。彼等は逸早（いちはや）くも、自分と共に立つて居る『警告者』の一団を見付けて、駈け出して来た。両団の間に交換された会話は次の如くである。『何家（どこ）のがん、こだ！』『狂人（ばか）のよ、繁のよ。』『アノ高沼の繁（しげる）狂人（ばか）のが？』『ウム然（さう）よ、高沼の狂人のよ。』『ホー。』『今朝の新聞にも書かさつて居（え）だずでヤ、繁ア死んで好（え）エごと

したつて。』『ホー。』

　高沼繁！　狂人(ばか)繁！　自分は直ぐ此名が決して初対面の名でないと覚つた。何でも、自分の記憶の底に沈んで居る石塊(いしころ)の一つの名も、たしか『高沼繁』で、そして此名が、たしか或る狂人(きやうじん)の名であつた様だ。――自分が恁う感じた百分の一秒時、忽ち又一事件の起るあつて、少からず自分を驚かせた。

　今迄自分の立つて居る石橋に土下座して、懐中(ふところ)の赤児(あかご)に乳を飲ませて居た筈の女乞食が、此時卒(には)かに立ち上つた。立ち上るや否や、茨(おどろ)の髪をふり乱して、帯もしどけなく、片手に懐中(ふところ)の児を抱き、片手を高くさ

し上げ、裸足（はだし）になつて駆け出した、駆け出したと見るや否や、疾風の勢を以て、かの声無く静かに練つて来る葬列に近づいた。近づいたナと思ふと、骨の髄までキリ〳〵と沁む様な、或る聴取り難き言葉、否、叫声が、嚇（かつ）と許り自分の鼓膜を突いた。呀（あ）ツと思はず声を出した時、かの声無き葬列は礑（はた）と進行を止めて居た、そして、棺を担いだ二人の前の方の男は左の足を中有（ちう）に浮（うか）して居た。其爪端（つまさき）の処に、彼（か）の穢（きた）ない女乞食が撻（だう）と許り倒れて居た。自分と並んで居る一団の少年は、口々に、声を限りに、『あれヤー、お夏だ、お夏だツ、狂女（ばかをなご）だツ。』と叫んだ。

『お夏』と呼ばれた彼の女乞食が、或る聴取り難い言葉を一声叫んで、棺に取縋つたのだ。そして、彼の担いで居る男に蹴倒されたのだ、この非常なる活劇は、無論真の一転瞬の間に演ぜられた。

噫（ああ）、噫、この『お夏』といふ名も亦、決して初対面の名ではなかつた。矢張自分の記憶の底に沈んで居る石塊（いしころ）の一つの名であつた。そして此名も、たしか或る狂女（きやうじよ）の名であつた様だ。

以上二つの旧知の名が、端なく我が頭脳（あたま）の中でカチリと相触れた時、其一刹那、或る荘厳な、金色燦然たる一光景が、電光の如く湧いて自分の両眼に立ち塞が

つた。

自分は今、茲に霎時(しばらく)、五年前(ねんぜん)の昔に立返らねばならぬ。時は神無月末の或る朝まだき、処は矢張此の新山祠畔の伯母が家。

史学研究の大望を起して、上京を思立つた自分は、父母の家を辞した日の夕方、この伯母が家に着いて、晩(く)れゆく秋の三日(みつか)四日(よつか)、あかぬ別れを第二の故郷と偕(とも)に惜み惜まれたのであつた。

一夜(ひとよ)、伯母やお苑さんと随分夜更くるまで語り合つて、枕に就いたのは遠近(をちこち)に一番鶏の声を聞く頃であつ

たが、翌くる朝は怎（ど）うしたものか、例になく早く目が覚めた。枕頭（まくらもと）の障子には、わづかに水を撒いた許りの薄光（うすあかり）が、声もなく動いて居る。前夜お苑さんが、物語に気を取られて雨戸を閉めるのを忘れたのだ。まだ〳〵、早いな、と思つたが、大望を抱いてる身の、宛然（さながら）初陣の暁と云つたやうな心地は、目がさめてから猶温かい臥床（ふしど）を離れぬのを、何か安逸を貪る所業の様に感じさせた。自分は、人の眠を妨げぬやうに静かに起きて、柱に懸けてあつた手拭を取つて、サテ音させぬ様に障子を明けた。秋の朝風の冷たさが、颯（さ）と心地よく全身に沁み渡る。庭へ下りた。

井戸ある屋後（をくご）へ廻ると、此処は半反歩許りの野菜畑で、霜枯れて地に伏した里芋の広葉や、紫の色褪（あ）せて茎許りの茄子の、瘦せた骸骨（むくろ）を並べてゐる畝や、抜き残された大根の剛（こは）ばんだ葉の上に、東雲（しののめ）の光が白々と宿つて居た。否（いや）これは、東雲の光だけではない、置き余る露の珠が東雲の光と冷かな接吻（くちづけ）をして居たのだ。此野菜畑の突当りが、一重の木槿垣（もくげがき）によつて、新山堂の正一位様と背中合せになつて居る。満天満地、闃（げき）として脈搏つ程の響もない。

顔を洗ふべく、静かに井戸に近（ちかづ）いた自分は、敢て喧（かし）ましき吊車の音に、この暁方（あかつきがた）の神々しい静寂（しづけさ）を破る

必要がなかつた。大きい花崗石（みかげいし）の台に載つた洗面盥には、見よ見よ、溢（こぼ）れる許り盈々（なみなみ）と、毛程の皺さへ立てぬ秋の水が、玲瓏（れいろう）として銀水の如く盛つてあるではないか。加之（しかのみならず）、此一面の明鏡は又、黄金（こがね）の色のいと鮮かな一片（ひとひら）の小扇をさへ載せて居る。――すべての木の葉の中で、天（あめ）が下の王妃（きさい）の君とも称ふべき公孫樹（いてふ）の葉、――新山堂の境内の天聳（あまそそ）る母樹（ははぎ）の枝から、星の降る夜の夜心に、ひらり〱と舞ひ離れて来たものであらう。

自分は唯恍（くわう）として之に見入つた。この心地は、かの我を忘れて魂無何有（むかう）の境に逍遥（さまよ）ふといふ心地ではない。謂はば、東雲の光が骨の中まで沁み込んで、身も

心も水の如く透き徹る様な心地だ。較々(やや)霎時(しばし)して、自分は徐(おも)ろに其一片(ひとひら)の公孫樹の葉を、水の上から摘み上げた。そして、一滴(ひとつ)二滴(ふたつ)の銀(しろがね)の雫を口の中に滴(た)らした。そして、いと丁寧に塵なき井桁の端に載せた。

顔を洗つてから、可成(なるべく)音のせぬ様に水を汲み上げて、盥の水を以前(もと)の如く清く盈々(なみなみ)として置いて、さて彼の一片の小扇をとつて以前の如くそれに浮べた。恪(かく)して自分は、云ふに云はれぬ或る清浄な満足を、心一杯に感じたのであつた。

起き出でた時よりは余程明るくなつたが、まだ〱

日の出るには程がある。家の中でも、隣家(となり)でも、その隣家(となり)でも、誰一人起きたものがない。自分は静かに深呼吸をし乍ら、野菜畑の中を彼方此方(あちこち)と歩いて居た。

だん〳〵進んで行くと、突当りの木槿垣の下に、山の端はなれた許りの大満月位な、シツポリと露を帯びた雪白の玉菜(キャベーヂ)が、六個(むつ)七個(ななつ)並んで居た。自分は、霜枯れ果てた此畑中に、ひとり実割れるばかり豊(ふくよ)かな趣を見せて居る此『野菜の王』を、少なからず心に嬉しんだ。

不図(ふと)、何か知ら人の近寄る様なけはひがした。菜園満地の露のひそめき乎(か)？ 否々、露に声のある筈がな

い。と思つて眼を転じた時、自分はひやりと許り心を愕（おどろ）かした。そして、呼吸（いき）をひそめた。

前にも云つた如く、今自分の前なる古い木槿垣は、稲荷社の境内と此野菜畑との境である。そして此垣の外僅か数尺にして、朽ちて見える社殿の最後の柱が立つて居る。人も知る如く、稲荷社の背面には、高い床下に特別な小龕（せうがん）が造られてある。これは、夜な〱正一位様の御使なる白狐が来て寝る処とかいふ事で、かの鰯の頭も信心柄の殊勝な連中が、時に豆腐の油揚や干鯡（ほしにしん）、乃至（ないし）は強飯（こはいひ）の類の心籠めた供物（くぶつ）を入れ置くところである。今自分は、落葉した木槿垣を透（すか）して、此

白狐の寝殿を内部まで覗ひ見るべき地位に立つて居たのだ。

然し、自分のひやりと許り愕いたのは、敢て此処から牛の様な白狐が飛び出したといふ訳ではなかつた。

此古い社殿の側縁(そくえん)の下を、一人の異装した男が、破草履(やれざうり)の音も立てずに、此方(こなた)へ近づいて来る。脊のヒヨロ高い、三十前後の、薄髯の生えた、瘦せこけた頰に些(さ)の血色もない、塵埃(ごみ)だらけの短かい袷を着て、穢(よご)れた白足袋を穿いて、色褪せた花染メリンスの女帯を締めて、赤い木綿の截片(きれ)を頸に捲いて、……俯向いて足の爪尖を瞠(みつ)め乍ら、薄笑(うすらわらひ)をして近づいて来る。

自分は一目見た丈けで、此異装の男が、盛岡で誰知らぬもののなき無邪気な狂人、高沼繁であると解つた。彼が日々喪狗の如く市中を彷徨いて居る、時として人の家の軒下に一日を立ち暮らし、時として何か索むるものの如く同じ道を幾度も〳〵往来して居る男である事は、自分のよく知つて居る処で、又、嘗て彼が不来方城頭に跪いて何か呟やき乍ら天の一方を拝んで居た事や、或る夏の日の真昼時、恰度課業が済んでゾロ〳〵と生徒の群り出づる時、中学校の門前に衛兵の如く立つて居て、出て来る人ひとり〳〵に慇懃な敬礼を施した事や、或る時、美人の名の高かつた、時の県

知事の令夫人が、招魂社の祭礼の日に、二人の令嬢と共に参拝に行かれた処が、社前の大広場、人の群つて居る前で、此男がフイと人蔭から飛び出して行つて、大きい浅黄色の破風呂敷（やれふろしき）を物をも云はず其盛装した令夫人に冠せた事などは、皆自分の嘗て親しく目撃したところであつた。彼には父もあり母もある、また家もある。にも不拘（かかはらず）、常に此新山堂下の白狐龕（びやつこがん）を無賃の宿として居るといふ事も亦、自分の聞き知つて居た処である。

　異装の男の何人であるかを見定めてからは、自分は平生の通りの心地になつた。そして、可成彼に暁（さと）られ

ざらむ様に息を殺して、好奇心を以て仔細に彼の挙動に注目した。

薄笑をして俯向き乍ら歩いてくる彼は、軈(やが)て覚束なき歩調(あしどり)を進めて、白狐龕の前まで来た。そして、礑(はた)と足を止めた。同時に『ウツ』と声を洩して、ヒヨロ高い身体を中腰にした。ギリ〱と少許(すこし)づつ少許づつ退歩(あとしざり)をする。――此名状し難き道化た挙動は、自分の危く失笑せむとするところであった。

殆んど高潮に達した好奇心を以て、自分は彼の睨んで居る龕の内部を覗いた。

今迄毫(がう)も気が付かなんだ、此処にも亦一個の人間が

居る。——男ではない。女だ。赤縞の、然し今はただ一色(ひといろ)に穢(よご)れはてた、肩揚のある綿入を着て、グル〳〵巻にした髪には、よく七歳(ななつ)八歳(やつ)の女の児の用ゐる赤い塗櫛をチヨイと挿して、二十(はたち)の上を一つ二つ、頸筋は垢で真黒だが、顔は円くて色が白い…………。

　これと毫厘(がり)寸法の違はぬ女が、昨日の午過(ひるすぎ)、伯母の家の門に来て、『お頼(だん)のまうす、お頼(だん)のまうす。』と呼んだのであつた。伯母は台所に何か働いて居つたので、自分が『何家(どこ)の女客ぞ』と怪しみ乍ら取次に出ると、『腹が減つて腹が減つて一足も歩かれなエハンテ、何卒(どうか)何か……』と、いきなり手を延べた。此処へ伯母

が出て来て、幾片かの鳥目を恵んでやつたが、後で自分に恁話した。——アレはお夏といふ女である。雫石の旅宿なる兼平屋（伯母の家の親類）で、十二の時から下婢をして居たもの。此頃其旅宿の主人が来ての話によれば、稚い時は左程でもなかつたが、年を重ぬるに従つて段々愚かさが増して来た。此年の春早く、連合に死別れたとかで独身者の法界屋が、其旅宿に泊つた事がある。お夏の挙動は其夜甚だ怪しかつた。翌朝法界屋が立つて行つた後、お夏は門口に出て、其男の行つた秋田の方を眺め〳〵、幾等叱つても嚇しても二時間許り家に入らなかつた。翌朝主人の起きた時、

お夏の姿は何処を探しても見えなかつた。一月許り前になつて偶然(ひよつこり)帰つて来た。が其時はモウ本当の愚女(ばか)になつて居て、主人であつた人に逢ふても、昔の礼さへ云はなんだ。半年有余の間、何をして来たかは無論誰も知る人はないが、帰つた当座は二十何円とかの金を持つて居つたさうナ。多分乞食をして来たのであらう。此盛岡に来たのは、何日からだか解らぬが、此頃は毎日彼様(ああ)して人の門に立つ。そして、云ふことが何時でも『お頼(だん)のまうす、腹が減つて、』だ。モウ確然(すつかり)普通の女でなくなつた証拠には、アレ浩さんも見たでせう、乞食をして居乍ら、何時でもアノ通り紅(べに)をつけて

新らしい下駄を穿いて居ますよ。夜は甚麼処(どんな)に寝るんですかネー。――

此お夏は今、狭い白狐龕の中にベタリと坐つて、ポカンとした顔を入口に向けて居たのだ。余程早くから目を覚まして居たのであらう。

中腰になつてお夏を睨めた繁は、何と思つたか、犬に襲はれた猫のする様に、唇を尖らして一声『フウー』と哮(いが)んだ。多分平生自分の家として居る場所を、他人に占領された憤怒を洩したのであらう。

お夏も亦何と思つたか、卒(には)かに身を動かして、斜に背(せな)を繁に向けた。そして何やら探す様であつたが、取

り出したのは一個の小さい皿――紅皿である、呀（オヤ）と思つて見て居ると、唾に濡した小指で其紅を融かし始めて二度三度薄からぬ唇へ塗りつけた。そして、チヨイト恥かしげに繁の方に振向いて見た。

繁はビク〳〵と其身を動かした。

お夏は再び口紅をつけた。そして再び振向いて恥かしげに繁を見た。

繁はグツと喉を鳴らした。

繁の気色の較々（やや）動いたのを見たのであらう、お夏は慌しく三度口紅をつけた。そして三度振向いた、が、此度は恥し気にではない。身体さへ少許（すこし）捩向けて、そ

して、そして、繁を仰ぎ乍らニタ〳〵と笑つた。紅をつけ過した為に、日に燃ゆる牡丹の様な口が、顔一杯に拡がるかと許り大きく見える。

自分は此時、全く現実といふ観念を忘れて了つて居た。宛然（さながら）、ヒマラヤ山（さん）あたりの深い深い万仭の谷の底で、巌（いはほ）と共に年を老（と）つた猿共が、千年に一度演（や）る芝居でも行つて見て居る様な心地。

お夏が顔の崩れる許りニタ〳〵と笑つた時、繁は三度声を出して『ウツ』と唸つた。と見るや否や、矢庭に飛びついてお夏の手を握つた。引張り出した。此時の繁の顔！　笑ふ様でもない、泣くのでもない。

自分は辞（ことば）を知らぬ。

お夏は猶ニタ〱と笑い乍ら、繁の手を曳くに任せて居る。二人は側縁（そばえん）の下まで行つて見えなくなつた。社前の広庭へ出たのである。――自分も位置を変へた。広庭の見渡される場所（ところ）へ。

坦たる広庭の中央には、雲を凌（しの）いで立つ一株の大公孫樹があつて、今、一年中唯一度の盛装を凝（こら）して居た。葉といふ葉は皆黄金の色、暁の光の中で微動（こゆるぎ）もなく、碧々として薄（うつす）り光沢（つや）を流した大天蓋（おほぞら）に鮮かな輪廓をとつて居て、仰げば宛然（さながら）金色（こんじき）の雲を被（き）て立つ巨人の姿である。

二人が此大公孫樹の下まで行つた時、繁は何か口疾（くちど）に囁いた。お夏は頷（うなづ）いた様である。

忽ち極めて頓狂な調子外れな声が繁の口から出た。

『ヨシキタ、ホラ〱。』

『ソレヤマタ、ドツコイシヨ。』

とお夏が和した。二人は、手に手を放つて踊り出した。踊といつても、元より狂人の乱舞である。足をさらはれてお夏の倒れることもある。撞（だう）と衝き当つて二人共々重なり合ふ事もある。繁が大公孫樹の幹に打衝（ぶつつか）つて度を失ふ事もある。そして、慠（かう）いふ事のある毎に、二人は腹の底から出る様な声で笑つて〱、笑つて了

へば、『ヨシキタホラ〱』とか、『ソレヤマタドツコイシヨ』とか、『キタコラサツサ』とか調子をとつて、再び真面目に踊り出すのである。

※々(さやさや)［＃「王＋倉」、54-下-20］と声あつて、神の笑(ゑま)ひの如く、天上を流れた。——朝風の動き初(そ)めたのである。と、巨人は其被(き)て居る金色の雲を断(ちぎ)り断つて、昔ツオイスの神が身を化(け)した様な、黄金の雨を二人の上に降らせ始めた。嗚呼、嗚呼、幾千万片と数の知れぬ金地の舞の小扇が、縺(もつ)れつ解けつヒラ〱と、二人の身をも埋むる許り。或ものは又、見えざる糸に吊らるる如く、枝に返らず地に落ちず、光(つや)ある風に身を揉ませて

居る。空に葉の舞、地の人の舞！　之を見るもの、上なるを高しとせざるべく、下なるを卑(ひく)しとせざるべし。黄金の葉は天上の舞を舞ふて地に落つるのだ。狂人繁と狂女お夏とは神の御庭に地上の舞を舞ふて居るのだ。

　突如、梵天(ぼんてん)の大光明が、七彩赫灼(かくしやく)の耀(かがやき)を以て、世界開発(かいほつ)の曙の如く、人天(にんてん)三界を照破した。先づ、雲に隠れた巨人の頭(かしら)を染め、ついで、其金色の衣を目も眩(くらめ)く許(ばかり)に彩り、軈(やが)て、普(あま)ねく地上の物又物を照し出した。朝日が山の端を離れたのである。

　見よ、見よ、踊りに踊り、舞ひに舞ふお夏と繁が顔のかがやきを。瘦せこけて血色のない繁は何処へ行つ

た？　頸筋黒くポカンとしたお夏は何処へ行つた？今此処に居るのはこれ、天(そら)の日の如くかがやかな顔をした、神の御庭の朝の舞に、遥か下界から撰び上げられた二人の舞人である。金色の葉がしきりなく降つて居る。金色の日光が鮮かに照して居る。其葉其日光のかがやきが二人の顔を[illegible]染(かう)めて見せるのか？　否、然(さう)ではあるまい。恐らくは然ではあるまい。

若し然とすると、それは一種の虚偽である。此荘厳な、金色燦然たる境地に、何で一点たりとも虚偽の陰影の潜むことが出来やう。自分は、然でないと信ずる。

全く心の働きの一切を失つて、唯、恍として、茫と

して、蕩として、目前の光景に我を忘れて居た自分が、此時僅かに胸の底の底で、あるかなきかの声で囁やくを得たのは、唯次の一語であつた。――曰く、『狂者は天の寵児だと、プラトーンが謂つた。』と。

お夏が声を張り上げて歌つた。

『惚れたーアー惚れたーのーオ、若松様アよーオー、ハア惚れたよーツ。』

『ハア惚れた惚れた惚れたよやさー。』

と繋が次いだ。二人の天の寵児が測り難き全智の天に謝する衷心の祈禱は、実に此の外に無いのであらう。

電光の如く湧いて自分の両眼に立ち塞がつた光景は、宛然（さながら）幾千万片の黄金の葉が、さといふ音もなく一時に散り果てたかの様に、一瞬にして消えた。が此一瞬は、自分にとつて極めて大切なる一瞬であつた。自分は此一瞬に、目前に起つて居る出来事の一切（すべて）を、よく〱解釈することが出来た。

疾風の如く棺に取縋つたお夏が、蹴られて撞と倒れた時、懐の赤児が『ギヤツ』と許り烈しい悲鳴を上げた。そして此悲鳴が唯一声であつた。自分は飛び上る程喫驚（きつきやう）した。ああ、あの赤児は、つぶされて死んだのではあるまいか。…………

（以下続出）

〔「明星」明治三十九年十二月号〕

底本：「石川啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房
　　１９７８（昭和53）年10月25日初版第1刷発行
　　１９９３（平成５年）年５月20日初版第７刷発行
底本の親本：「明星　十二号」
　　１９０６（明治39）年12月発行
初出：「明星　十二号」
　　１９０６（明治39）年12月発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：川山隆

２００８年10月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。